命のしるし（最終回）

小俣麦穂

絵 長浜めぐみ

〈前号のあらすじ〉

エレたちは山岳民の地に向けて、山道を進んだ。シェルツは生贄を必要とする、信仰の本質を明かして、エレの覚悟を量ろうとする。だが、自分の顔の痣を「神が選んだ者の身体には、印が現れる」と信じたエレにはもう、怯えさえなくなっていた。エレは自分を我が子の身代わりにした親子や山岳民の長や神官にいら立っているザック、今のシェルツの心情と乗せてくれたラバまでも思いやり、感謝して去って行く。今、生贄の巫女の化粧を始めた。

6. 人の痛み

翌朝の集落は、朝日が昇るよりも前から祭りの気配に満ちていた。笛と鳴子の調べが途切れることなく、山々にこだましながら響く。

農夫の家からエレをつれて出発した朝のように、抜ける